

豊橋の玉糸による織物

田中 竜也

はじめに

かつて豊橋市は「蚕都」と称されるほど製糸が盛んであり、その産業が発展したきっかけの一つは、玉糸の製品化であった¹。明治中期から玉糸を手掛ける者が増えて生産量は拡大し、豊橋の玉糸製造は昭和初期に全国の四割から五割を占めるまでになる。しかしながら、戦時中の空襲で多くの工場は焼け操業が困難になった。戦後和装から洋装主体になり、化学繊維が伸張して絹糸の需要が減少、原料の入手が難しくなったこともあり、豊橋で玉糸製糸は現在行われていない²。

これまで豊橋における玉糸製糸の歴史に関する文献はあるものの、玉糸を元にした製品について記されているものは少ない。本稿では、豊橋で生産された玉糸の出荷先とその製品化について、現時点で把握していることを述べることにする。

玉糸の出荷先

豊橋産の玉糸の国内販路について、『三州玉糸』の中で次のように記載されている³。

名古屋方面	880
福井	600
小松	450
京都	350
福島	1,250
岩代飯能	2,450
金沢	660
栃尾	1,580
八王子	7,200
秩父	150
五日市	460
岩代川俣	1,880
前橋	13,200
伊勢崎	1,240
桐生	850
足利	4,630
米沢	350
その他各地	1,014

内地販路と需要数量(単位梱)
昭和2年(1927)

『豊橋蚕糸の歩み』には、玉糸の移輸出先について触れられている⁴。その記述を基に表にしたのが次の図である。

豊橋	3,979 梱	
↓		
八王子	793 梱	19%
横浜	777 梱	19%
前橋	719 梱	18%
神戸	414 梱	10%
足利	281 梱	7%
川俣	188 梱	4%
その他	807 梱	23%

玉糸の発送地

昭和4年(1929)8月

※横浜、神戸は輸出
(三遠玉糸製造同業組合
発送地明細書より)

また『改訂版 玉糸の町豊橋(糸徳製糸)』には、大正末期頃に玉糸を使用した機業地が記載されている⁵。

京都、丹後、福井、越前、前橋、八王子、桐生、足利、福島、福島川俣

各地の機屋さんは、銘仙の着尺を織る。

福島川俣のみは、特殊の玉絹(節絹)と言って、裏地用を織っていました。

輸出は「……」米国が多く、洋服生地を使用した様子でした。

このほか『大林製糸百年史』では「玉糸百年の歩み」の章の中で、昭和戦前の玉糸の出荷先について次のように述べられている⁶。

戦前は内地向けとして、秩父、足利、伊勢崎、八王子、福島、金沢などの機業地に送られて、銘仙、紬、それから蒲団の裏地に織り出され、秩父伊勢崎銘仙、村山大島、結城紬、福島、金沢で裏地として名を成していた。

玉糸は糸が絡まって引き出されるので、節ができる。このため節糸ともいわれ、高級な絹織物には向かないものとされてきた。引用した資料でも、国内の産地では銘仙や紬、裏地としての利用が挙げられている。

次章から、これらの文献によって示されている機業地を中心に、各地で生産された織物を挙げていくことにする。

銘仙

『改訂版 玉糸の町豊橋（糸徳製糸）』と『大林製糸百年史』には、豊橋の玉糸が出荷先の産地で銘仙めいせんに用いられたと書かれている。銘仙は玉繭などのくず繭から取った糸で作られた、平織りの織物である。丈夫で絹織物としては安価であり、大正から昭和の初めにかけて、生活着、外出着として人気を博した。

関東地方の西部から北部に位置する伊勢崎（群馬県）、秩父（埼玉県）、足利（栃木県）、八王子（東京都）、桐生（群馬県）の五か所が銘仙の主要な産地であったとされている⁷。銘仙の生産量は特に大正一〇年（一九二一）頃と昭和五年（一九三〇）頃が多かった⁸。この時期は豊橋の玉糸生産量も最盛期を迎えている⁹。

『三州玉糸』から引用した表をみると、八王子、秩父、伊勢崎、桐生、足利、飯能と、銘仙の産地が玉糸の出荷先に挙げられている。『豊橋蚕糸の歩み』には八王子と足利、『改訂版玉糸の町豊橋（糸徳製糸）』には八王子、桐生、足利が、また『大林製糸百年史』にも秩父、足利、伊勢崎、八王子が入っている。

『三州玉糸』の表の中で最大量の販路となっている前橋（群馬県）は、銘仙の産地というわけではないものの、日本初の洋式器械製糸場が作られるなど製糸産業が栄えていた。玉糸はこの地で撚糸に加工されるなどして、他の織物産地へ再出荷された。

出荷先が分かったとしても、現存する銘仙の着物を見てどこで作られたのか判別するのは難しい。産地は関東地方に集まっており、製品の区分が明確でないうえ、縫製された着物なので生産地を示すラベルもない¹⁰。

次に銘仙の産地に基づいた文献について述べる。昭和五年に刊行された『最近足利織物標本と解説（附、両毛織物）』には、玉糸は「太織、銘仙、節糸織、大島紬」に使用されるとあり、「前橋、豊橋はその主なる集散地」と記載されている¹¹。また昭和三五年刊『足利織物史』には、明治後期の移入元について「足利でもつとも多く使用されるものは、「……」群馬県産のものが多く、玉糸・熨斗糸は、栃木県および前橋、八王子、三河地方のものであり¹²、「……」と述べられている。他の産地の秩父、桐生、八王子では豊橋について記載された文献を現時点で見つけられない。伊勢崎に関しては、伊勢崎織物協同組合から「特に戦後に於いては豊橋の玉糸は高級であったため、当地では輸入品等割安感のある玉糸を使用していた」との回答をいただいた¹³。また昭和戦前の文献は、戦災で失われてしまったという。

紬

紬つむぎとは生糸に向かない品質のくず繭で真綿を作り、そこから紡ぎ出された紬糸を使った平織りの着物である。実際には紬糸のほか、玉糸や生糸を使うなど産地によって違いがある。落ち着いた味わいがあり、丈夫な紬は日本各地で織られてきた。『亡き祖母のかたみ』には大正一五年（一九二六）の状況として、次のような記載がある¹⁴。

主なる需要地

内地 秩父、八王子、前橋、伊勢崎、桐生、足利、飯能、名古屋、米澤、鹿見島、大島等

大島紬は奄美大島と鹿児島市周辺で作られている織物で、泥染めの技法で知られる。引用の中の需要地に大島紬産地の（奄美）大島と鹿児島が挙げられている。

現在は経緯の糸に生糸が用いられているが、かつて大島紬には玉糸が使用されていた。昭和五六年刊行の『本場奄美大島紬協同組合創立八十年記念誌』の中で次のように記載されている。¹⁵

4 原料糸の変遷

明治二十四年頃大島紬は市場で人気を博し著しく需要が増大した。これに伴ない原料糸も地場産の手紡糸ではまにあわなくなり、同二十八年（一八九五）頃には名古屋地方から玉糸練撚糸を移入使用するようになった。

また大正四年（一九一五）には玉糸練撚一辺倒から本絹練撚糸のものも生産され、昭和十年（一九三五）頃には殆んど本絹練撚糸が使用されて現在に至っている。

明治中期から大正期という限られた期間ではあるものの、玉糸が使用されており、同書には玉糸の長着の写真も掲載されている。¹⁶ただし名古屋地方の玉糸ということ、豊橋産が含まれているかどうかはこの記述からは分からない。¹⁷

先に紹介した『大林製糸百年史』の引用の中では、結城紬と村山大島が挙げられている。結城紬は茨城県結城市と栃木県小山市を主な生産地とする絹織物である。真綿から手紡ぎした糸を用いるため、ふっくらとした感触があるのが特徴である。村山大島紬は東京都武蔵村山市周辺で作られる、大島紬に似た雰囲気を持つ絹織物である。かつては経糸に生糸、緯糸に玉糸が使われ、板締めで染色された。

また、石川県の金沢、小松に隣接する白山市で生産されている牛首紬

は、緯糸に玉糸を使うことを伝統にしており、先染め以外にも後染めの加賀友禅を施されたものがある。このほか、米沢や栃尾も紬の産地である。

豊橋では昭和七年（一九三二）から八年頃、玉糸を使った紬織物を作り、吉田紬として売り出した。¹⁸名古屋市場で好評を得たものの、数年で途絶えてしまったという。

その他の織物

玉糸は銘仙や紬以外の織物にも使われたほか、帯、着物の裏地、布団の裏地などにも利用されている。¹⁹

海外への輸出は先に引用した『豊橋蚕糸の歩み』の図によると、横浜と神戸で三割近くを占めたように、決して少なくなかった。『大林製糸百年史』には次のように述べられている。

外国には、インド、エジプト、フランス、南洋諸島等に輸出されていた。「……」

戦後はアメリカ輸出が急激に殖えた。

アメリカでの需要が増えた理由にも触れられていて、玉糸を用いたシルクシヤンタンが婦人服、運動着、ハンドバッグなどに活用されていたからだという。²⁰

シヤンタンは経糸に生糸、緯糸に玉糸などの節糸を用いた、平織りの絹織物である。絹の光沢と節のある風合いでシックな布地として人気がある。ドレスやスーツ、ブラウスといった洋服以外にも、壁材やカーテンなどインテリアの織物に利用されている。

おわりに

豊橋の主要産物であった玉糸が、実際にどのような製品に使われていたかについて、まとまった資料が乏しかったことに着目して考察を試みた。まず、豊橋産の玉糸の出荷先を挙げ、各々の産地で玉糸に関連した織物があるかどうか検討した。特に銘仙と紬が該当する織物であることが分かり、重点的に取り上げた。

銘仙の主要な産地である伊勢崎、秩父、足利、八王子、桐生は玉糸の出荷先の中にすべて含まれていた。紬については、大島紬、結城紬、村山大島紬など多くの産地が取引対象となっており、豊橋の玉糸の販路は全国各地に広がっていたことが改めて認識できた。

とはいえ、今回の論考では関連資料の調査が不十分であることは否めず、資料の収集と分析を今後も続けていく必要がある。加えて、豊橋産の玉糸が用いられた織物を特定することはできておらず、製品自体の調査を行うことも大切である。豊橋の玉糸製造が途絶え、資料と情報が失われつつある現在、迅速な調査の進展が望まれる。

なお本稿は「豊橋市美術博物館コレクション展 暮らし・アート」(会期 二〇二一年二月六日～三月七日)のための調査が基となっている。株式会社ふじはらの藤原省治氏、国岡株式会社の国岡洋介氏、着物収集・研究家の樋口富喜子氏を始め多くの方々にご助言をいただいた。この場を借りて改めて感謝の意を表したい。

(豊橋市美術博物館学芸員)

註

(1) 通常の製糸では一匹の蚕が作った繭(精繭)から糸が取られるのに対し、二匹で作った繭は玉繭と呼ばれる。養蚕家の手掛けた繭のうち二割程度は玉繭が生じ、品質の劣るくず繭として、真綿の材料などにされてきた。小渕志

(一八四七～一九二九)は安価な玉繭に注目し、そこから糸を引き出す方法を考案。自ら興した糸徳製糸を玉糸の専業工場とした。また、大林宇吉(一八六〇～一九三三)は蒸気機関を利用した玉糸の器械製糸に成功し、工場を近代化して増産に努めた。豊橋の製糸業の歴史については以下のような文献がある。三遠玉絲製造同業組合編『三州玉絲』三遠玉絲製造同業組合事務所一九二八年、玉城肇『三河地方における産業発達史概説』愛知大学中部地方産業研究所 一九五五年、愛知県蚕糸業史編纂委員会編『愛知県蚕糸業史』愛知県蚕糸業振興会 一九六四年、豊橋市近世民俗資料調査委員会編『豊橋蚕糸の歩み』豊橋市教育委員会 一九七五年、豊橋市史編集委員会編『豊橋市史』第三卷 豊橋市 一九八三年、同 第四卷 一九八七年、橋山徳市編『改訂版 玉糸の町豊橋(糸徳製糸)』橋山徳市 一九八七年、大林卯一『大林製糸百年史』一九八八年、橋山徳市編『忘れえぬ蚕都・豊橋』橋山徳市 一九八八年、橋山徳市『糸の町』橋山徳市 一九九〇年、豊橋市編『とよはしの歴史』豊橋市 一九九六年、牧野茂『カイコって知ってますか』牧野茂 一九九九年、鈴木閑道 小淵義一編『亡き祖母のかたみ』小淵益男 二〇〇九年復刻、天野武弘『豊橋の玉糸繰糸技術と国内製糸工場の現状』『年報・中部の経済と社会』一一五～一二八頁 二〇一九年三月。

(2) 天野 前掲論文 一一五頁。玉糸工場のあった浅井製糸所は平成九年(一九九七)に閉鎖された。特絹糸を製造していた石川株式会社も令和元年(二〇一九)に生産を終了し、在庫を出荷するだけとなっている。

(3) 三遠玉絲製造同業組合編 前掲書 二二三頁。

(4) 豊橋市近世民俗資料調査委員会編 前掲書 五七頁。以下のような注釈が付けられている。「国内各地への移出が多い。玉糸の消費については、玉糸として使われるもの、前橋などの企業地で撚糸として他の企業地へ再移出される場合もあった。」

(5) 橋山編『改訂版 玉糸の町豊橋(糸徳製糸)』四二頁。三年後の著作『糸の町』にも同種の記載があり、変更点は生糸を含めた機業地になっていて、時期が大正初期からであることと、高崎が加えられている。また「各地の機屋さん

は」の後の文章が「玉糸は銘仙、生糸は羽二重、縮緬の着尺を織る」に変わっている。橋山徳市は大正一三年（一九二四）から糸徳製糸の本工場に勤務していた。

(6) 大林 前掲書 三、四頁。大林製糸は明治二十一年（一八八八）に大林宇吉が玉糸工場を建設して操業を始めた。豊橋の玉糸製糸業界で最大規模であったものの、平成九年（一九九七）に廃業した。

(7) 当該地域では江戸時代から、養蚕農家が売り物にならない玉糸や熨斗糸^{のしと}といった節糸で自家用に織った太織という絹織物を作っていた。この織物が次第に産業化され、銘仙と呼ばれるようになった。熨斗糸とは、繭の糸口を見つけて出すために取った糸を引き伸ばしたもの。

(8) 埼玉県立歴史と民俗の博物館編『特別展「銘仙」埼玉県立歴史と民俗の博物館 二〇二一年 六三頁。昭和五年には伊勢崎、秩父、足利、桐生、八王子、佐野、館林、所沢、青梅、村山、飯能が加盟した全国銘仙連盟が結成されている。伊勢崎や足利、秩父では銘仙よりも高級な絹織物のお召の開発、販売に注力するようになり、銘仙に代わってそれらの生産が増加していった。新井正直「銘仙モダンと職人たちの技」足利市立美術館監修『VIVID 銘仙』青幻舎 二〇一六年 一九一、一九二頁。

(9) 豊橋市史編集委員会編『豊橋市史』第四巻 五五九頁。一九三〇年代にアメリカを皮切りに世界恐慌が起ると、日本からの糸の輸出は急速に落ち込んだ。蚕種の改良、養蚕技術の発達によって、玉繭の生産自体も減少していった。

(10) 大森哲也「VIVID 銘仙、図案家の誕生と活躍」足利市立美術館監修 前掲書 一七七頁。生地のを詳細に分析すれば、産地や製作年代は特定できるという。同書では糸の分析によって実際に着物に玉糸などが使われているかが明らかにされている。以上については同書執筆で草雲美術館の大森哲也氏にご教示いただいた。

(11) 木村六助『最近足利織物標本と解説（附、両毛織物）』宝文館 一九三〇年 一三、一四頁。この文献は大森氏から教えていただいた。

(12) 早稲田大学経済史学会編『足利織物史』下巻 足利繊維同業会 一九六〇年 二〇一頁。この文献は足利織物伝承館の菅谷智子氏に紹介していただいた。

(13) 二〇二二年三月一九日付文書。

(14) 鈴木 前掲書 一四八頁。群馬県勢多郡誌編纂のために小淵志ちに求められた経歴の一部で、糸徳製糸の販路である。

(15) 本場奄美大島紬協同組合編『本場奄美大島紬協同組合創立八十周年記念誌』本場奄美大島紬協同組合 一九八一年 八三頁。

(16) 「泥染玉糸大島紬徳中柄 大正中期」同書 三七頁。

(17) 重村斗志乃利『大島紬誕生秘史』（南方新社 二〇〇七年）には明治三十二年（一八九九）時点で「奄美で使っている玉糸は、ほとんどが名古屋の豊橋地区で作られている。」（四〇頁）とあり、その玉糸は大阪市東区にある松元幸栄商店の松元弥市郎が扱っていると書かれている。また、奄美大島の紬生産業者が明治三〇年代に二度、豊橋駅近くにある村岡商店の村岡氏の工場を視察する場面が記されている（四二―四八頁、八二―八六頁）が、この豊橋の村岡氏についての詳細は不明である。

(18) 愛知県蚕糸業史編纂委員会編 前掲書 四四二頁。

(19) 明治二十六年（一八九三）、福井で羽二重の横糸用として玉糸販売に成功し、続いて各地域へ販路を拡大した。『豊橋市史』第三巻 六七九、六八〇頁。福島、石川も羽二重の産地。玉糸はかつて縮緬やお召、上布、袴地にも使用されていたという。三遠玉絲製造同業組合編 前掲書 一一、一二頁。

(20) 大林 前掲書 三、四頁。